

漢民族の服飾統一化への変遷

—五十年代から六十年代を中心に—

山内 智恵美

Transition in *Han* National Dress from the 1950's to the Middle of the 1960's

YAMAUCHI Chiemi

Abstract: During the Republic of China period (1911-1949), *Han* national dress underwent many design changes. However, for the first ten years of the People's Republic of China period (1949-present), *Han* national dress was severely limited by government regulation to the point that it became almost a standard uniform. In this paper, I would like to explain the four main factors that brought about this situation.

はじめに

服飾¹⁾文化は、個人的な嗜好以外に、地域・民族・国民・社会・歴史・経済・思想など、様々な要因の影響を謙著に受ける文化の一つであり、漢民族²⁾の服飾文化もその例外ではない。しかし、漢民族は、自国の文化に対して非常に保守的な面を見せる反面、二十世紀の服飾文化が、政治とイデオロギーの影響を強く受けて変化したため、伝統的な服飾文化を衰退させ、「民族衣装（服飾）³⁾」と呼ぶにふさわしい服飾を、二十一世紀に受け継いでいない。多くの人が、漢民族の民族衣装として頭に描く「旗装（旗袍・チャイナドレス）」は、満族の衣装が変化したものであるし、「中山服⁴⁾」は、孫文の命により、学生服を原型としてデザインされたものであり、民族衣装と呼ぶにはあまりにも早急である。では、漢民族が民族衣装と呼ぶにふさわしい服飾を、二十一世紀に受け継ぐことができなかったのだろうか。この問題に答えるには、二十世紀全体の服飾史変遷の流れを追う一方で、服飾変化を導いた時代背景・政治的背景・経済的背景・社会的背景など、服飾文化の背後にある様々な要素を検証する作業を時代ごとに試みなければならない。

中華人民共和国が成立して後の一時代は、前時代と一線を画すような変化が、社会の様々な方面で起こった。政府の改革に伴い、社会や人々の生活にいたるまで、各方面にわたり大きな変化が生まれた。もちろん、各方面にわたる変化が均一化して表れたわけではなく、大きく変化した部分があれば、僅かな変化しか起こらなかった部分も存在した。また、建国後、すぐに変化が表れたものがあれば、ゆっくりと潜伏した形で進行していったものも見られた。

中華人民共和国が成立した後、最初に取り組みされたのは、大陸に残る国民党の軍事的な残存集団を一掃することであった。その具体的手段として、著名な「三反運動」「五反運動」が展開されることになる。経済的方面においては、これらの運動を機に、「共産主義」や「社会主義」に至る新しい経

済的秩序を建設するための改革である「土地改革」「農業合作化」「都市工商業の改造」「大躍進」が実行されたのである。そしてこれらの運動は、新政府が新社会主義を建設することを外に向かってアピールするものであった。新社会主義社会を建設するための政治・軍事・経済政策と符合して、文化・イデオロギー・生活様式上の社会主義的文化運動も全面的に推し進められていった。これらの社会主義運動が積極的に進められていった背景には、社会全体、中華人民共和国の人民すべてを新しい社会主義のルールに乗せ、共産党が掲げる理想を人々一人一人の理想とし、中国を世界に例をみない「共産主義理想」に基づいた新社会に作り上げようとする政府の意図が働いていたからである。

上述したような社会的背景によって、服装の変化は、イデオロギー改革の影響を直接的に受けることとなる。服飾変革とイデオロギーがあまりにも密接に結びついた為、非常に興味深い現象を招くこととなる。つまり、この時代は、服飾の変化を生活レベルの変化（具体的で小さな変化）として片付けるのではなく、国家レベルの大事（原則的な変化）として捉えことになる。この傾向は二十世紀の前半五十年間に既に顕著に表れているが、中華人民共和国が成立して後は、政府の政治的権力が強くなった為、イデオロギーが政府によって統制されることが多くなり、イデオロギーが服飾に与える影響も前段階に比べ⁵⁾、直接的でより解りやすいものに変化していった。つまりこの時期服飾は、イデオロギーを外に向けて表現する具体的バロメーターとしての役割を担っていくことになる。

事実、中国人はこの時代、服飾から政府の政策態度を読み取る習慣を身につけていた。国家の指導者やテレビのアナウンサーが背広を着用するとき、中国国民は、国家の政策が改革開放へ向かって進んでいることを感じ取り、中山服を着用するとき、外国との間で何らかの不都合な関係が生じていること、外国に対し何らかの不審感を抱いていることを敏感に感じ取ったのである。服飾をバロメーターとしてイデオロギーを外に向けて表現する態度は、中国国内に限らず、対外的な外交を判断する材料にも使われた。「我が国の群衆は、国家の指導者が背広を着用するか否かによって、国家が改革と開放政策を堅持しようとしているか否かを判断する材料として使用している。⁶⁾」と述べるように、服飾がこの時代を映し出す鏡としての役割を果たしていたのである。

中国の服飾変遷に関する研究は、「服」「飾」を問わず、近年盛んに取り組まれており、「服」部は、子供服から下着、靴まで、「飾」部では、化粧、髪型、簪へと、研究が細分化する一方で、それまでの主に清代末までに限定した服飾史としての捉え方に二十世紀を含めようとする傾向へと移行している。特に二十世紀に注目して、服飾を捉える研究⁷⁾にも目が向けられてきている。よって、本論では、文化大革命に至る時代と前述したようなイデオロギーとの関係を持つ服飾変遷を結びつけることで、歴史の枠組みでは見えない、この時代の持つ一面を明らかにしたいと考える。

1 反帝国主義、反資本主義社会を背景とする変化

アメリカ政府が国民党を支援した為、四十年代末に起こった中国国内での内戦において、アメリカ軍は解放軍と戦うことになり、朝鮮戦争においても同様に解放軍と戦うこととなる。アメリカ軍が台湾へ進駐した時、アメリカ軍がベトナム南部へ進駐し、中国政府がベトナム北部を支持し冷戦状態が続く間、アメリカは「帝国主義陣営」のリーダーであり、中国人民の敵であった。このような状態の中、新聞や雑誌には「アメリカ帝国主義は全世界人民の最凶悪な敵である！」「アメリカ帝国主義を敵視せよ！アメリカ帝国主義を軽蔑せよ！アメリカ帝国主義を蔑視せよ！」⁸⁾というスローガンが日常的

に見られることとなる。この十何年間、中国大陸では、反帝国主義、反資本主義が主流を占め、文化的には、反帝国主義文化侵略、反資産階級腐朽文化がイデオロギーの主流を占めることになる。歴史学者はこのような社会的状態を、以下のように述べている。

一九五十年代以降、中国全土で西洋人、特にアメリカ人の影響を消し去ろうとする運動が巻き起こる。ハリウッドの映画は批判され、後に放映禁止の処置を受け、ソ連と中国の映画がその地位にとってかわる。西洋人の服装やスーツは批判され、旗袍やその他の「資産階級的」とされた古い中国式服装も批判された。新たな中国式の服飾が流行し始め、各種各様の制服が表れ、その中で最も有名なものが中山服、解放服或いは列寧装とよばれたものである。その後、所謂「毛式上着」も流行する。ごく短い間に、人々はハイヒール、毛皮類、アメリカ兵が残したジャケットやその他過去の品物を片付けるかまたは売りに出した。化粧が女性の顔から消え去り、「資産階級的」とされる服装を身に着けたために批判される人もいた。多くの人々はこれが、新社会の気風だと認め、彼らは自ら率先して、この時代の前進的歩みに後れを取らないように動き出した。⁹⁾

つまり、反帝国主義思想に支えられ、洋服はすぐに冷遇されることとなる。本来、中国語で「西装」「西服」と書かれる服装は、「西洋から来た服装」を意味するものであり、人々の意識の中に敵国世界の物というイメージを植えつけた。しかも、中国大陸内の多くの中国人は、「西装」すべてが国民党時代の産物と思いきみ「旧社会」を象徴する一部分とみなしたのである。つまり、「西装」は当時の中国人にとって、不快な気分させるものであり、嘗て人々が、素直に受け入れられた時代とは一線を画したのである。少数の人々の間で、時には「西装」を身に着けることもあったが、一般的な場面で、人々が「西装」を身に着けることはほとんどなかったし、もともと、多くの人々は「西装」など持ち合わせてもいなかった。このような状況から、服飾は、劇的な変化を招くことになる。日本同様、中国でも服飾の改革は西洋を模倣することから始まったのであるが、この時期、服飾の西洋化は「反動的な」方向に走ることに変化し、「西装」を身に着ける人は「イデオロギーが不健全な人」とみなされたのである。そして甚だしい時には、「帝国主義の犬」「資産階級の落後者」「西洋崇拜者」と呼ばれて攻撃を受けたのである。

しかし、可笑しなことであるが、この時期の中国人は、自分自身の中に、西洋（アメリカ）由来ということ、明確な基準では持ち合わせていなかった。彼らは「西装（洋服・背広）」は攻撃したけれども、その他の西洋式服飾には攻撃を加えていない。例えば、西側諸国より伝えられた西洋由来の制服、帽子、靴、髪型、シャツ、ズボンなどには攻撃を加えていないのである。つまり、厳格に言えば、彼らは「西装」に限定して反対はしたが、西洋由来の服飾に対しては反対していないのである。このため、皮肉にも、この時期でも服飾の西洋化は水面下で進んでいくことになる。

2 旧ソ連文化の台頭と衰退を背景とする変化

アメリカ文化が敵視されることと相反するように、旧ソ連文化が賞賛され受け入れられた。五十年代、中国人民は尊敬と崇拜の念を抱いてすべての面を「ソ連兄貴」¹⁰⁾に学ぶこととなる。経営管理の方法から子供の名前に至るまで、都市計画から軍服のデザインに至るまでである。外国語教育が、英語からロシア語に取って代わった中、高等学校での外国語学習の方法も旧ソ連から学び、服飾も例外なく、旧ソ連式が流行する。つまり、社会生活のあらゆる方面で旧ソ連文化にゴーサインがだされるようになったのである。旧ソ連の専門家達が家族を伴い中国を訪れ、旧ソ連映画も大量に翻訳されて

放映された。その中のいくつかの挿入歌は今でも街中で耳にすることができるほどである。ロシアや旧ソ連の小説も数多く翻訳され、旧ソ連の代表団や文化交流団も中国を訪問した。当時の旧ソ連式の彫塑や建築物は、今でも都市で目にすることができる。新聞や雑誌には日常的に、旧ソ連を賛同することを示すスローガン「ソ連人民の崇高な共産主義道徳品性を学ぶ」「ソ連は世界平和の堡壘を擁護する」「ここ数年のソ連の五ヵ年計画からソ連国家建設の成就を見て取る」「ソ連農民の集団生産と幸福な生活」「ソ連に学び、更に効果的に祖国の為に奉仕する」「積極的にソ連に学び、祖国の社会主義工業化を一步一步実現するために努力する」¹¹⁾などを目にするようになる。第二次世界大戦後、旧ソ連はそれまで中国においてアメリカが得ていた地位を獲得し、人々の新しい文化的模範へと急速に登りつめるのである。

旧ソ連の服飾文化が人々の間で新たに流行し、各種旧ソ連式の服飾が中国に受け入れられ、その中のいくつかは、比較的長い間流行した。ここで注目したいのは中国人の行動である。一方で中国人は西洋由来の文化を強く否定し、その一方で、意識的か無意識のうちかは別として、ある意味では都合よく融通をきかせて、西洋式の文化を取り入れている。服飾でも同様である。旧ソ連式の服飾も、もとを正せば西洋式服飾が原点であるが、このことは全く問題にはされていない。受け入れるか否かの選択は、何処に由来しているか否かではなく、何処の国から来たのかに重点が置かれたのである。本来、文化の性質上重視されるべき、文化的由来は軽視され、むしろ無視され、この時代には、何処の国から入ってきたかだけが問題にされたのである。つまり、その文化が民国期やアメリカ、西欧諸国に端を発するものであれば拒絶され、東欧や旧ソ連の社会主義国家に端を発するものであれば受け入れられたのである。当時、「布拉吉（ロシア語の音訳）」と呼ばれたものは、ワンピースの一種であり、当然その由来は西洋であるが、これが、資産階級の服装とみなされることはなかった。大きな折襟でボタンが並んだ洋服が「列寧装（レーニン服）」と呼ばれると、名前に「レーニン」が入っただけで、途端に革命のニュアンスを帯びた服装とみなされたのである。五十年代の中、後期、大きな花模様が流行したことがある。これは、旧ソ連から輸入された花柄の布地を使ったもので、大きな花柄の鮮やかな色彩が特徴的で、豊富なデザインから、ごく普通の人々の間で（中国人の感性と合わなかったのか、長くは流行することはなかったのであるが）この布地を使ってシャツやワンピースが作られた。つまり、布地が旧ソ連から入ったものであれば、デザインやスタイルなどの本質的なことは無視され、受け入れられたのである。

しかし、次第に中国人も「多くのソ連人によって認められたものの中に『資産階級』の雰囲気を帯びたものが相当数存在する」¹²⁾こと、旧ソ連人の服飾や行為はアメリカ人¹³⁾とあまり変化がないことを発見する。しかし、皮肉にも旧ソ連人や旧ソ連文化の強い影響は、中ソの外交関係の悪化が公開されるまで続くこととなる。

歴史は時には非常に興味深い局面を導き出す。当時、旧ソ連と中国の外交関係の悪化が公開され、中国政府は旧ソ連文化を批判して「修正主義」と呼び始めた時、反旧ソ連の略称は「反修」と呼ばれるようになる。¹⁴⁾この事は旧ソ連式服飾の流行に、すぐさま抑制の作用をもたらすこととなる。旧ソ連式の服飾はそれまでのようには流行しなくなり、これ以後「布拉吉」などの服飾を身に着けることは、人々の間で、してはならない行為と受け止められるようになる。

3 反封建、反搾取階級に関する変化

反「封建主義」を基調とする土壤も、当時は顕著であった。伝統文化の特色を受け継ぐものは、封建文化の残骸として位置づけられ、服飾に関しても「旗袍」などの中国式服装は、批判を受けることとなる。「長袍」「長衫」「馬褂」「瓜皮帽」「旗袍」などの地位は非常に不安定で、「封建主義」に端を発するものと見なされたり「資本主義」に端を発するものとして位置づけられたりした。当時の中国人は、それらがどのような階級や主義主張に帰属するものかをはっきりと理解することもなく、とにかく「労働階級」や「無産階級」の服飾でないものは、「老爺（旦那様）」「太太（奥様）」「少爺（若旦那様）」や「地主」「資本家」「工頭（親方）」「特務（スパイ）」「漢奸」「狗腿子（手先）」の服飾とみなされたのである。五、六十年代の映画や芝居、アニメーション、漫画、ポスター等に登場する人物の中で、封建主義を連想させ、象徴する人物や「反革命分子」と見なされた地主、姦商は、その誰もが伝統衣装である「長袍馬褂」を身にまとい、頭には「瓜皮帽」をかぶっていた。彼らの夫人は中国式の「偏襟襖」に指輪やイヤリングなどの装飾品を身につけ、爪を長くして登場するのが普通であった。

中華民国時代の服飾は、リベラルな思想に支えられ、西洋式の「西服」と中国式の「長袍」「旗袍」が同時期、同時代、同人物、ある時は一人物が着用する服飾の中に、西洋式と中国式が同時に見られる服飾多様化の時代であったが¹⁵⁾、中華人民共和国時代に入り、状況は急速に変化していく。中国政府が、国民党の歴史を清算し反封建主義を掲げたために、「長袍」「馬褂」「長衫」は時代に合わない不健全なものとなされ、人々の心に自然と反感を生み出し、衰退の一途をたどることになる。「旗袍」の衰退していく速度は、他の中国式服装に比べいささか緩やかであったが、長くその地位に留まる事はできなかった。

服飾史の立場からこれらの現象を分析すると、これらの変化は「上下一体型」から「上下分割型」への服飾の移行として捉えられる。わずかな間に「上下一体型」の服装は、女性のワンピースやオーバー以外ではほとんど見かけられなくなる。中国の歴史の中で、何千年という歴史を持つ「深衣制」¹⁶⁾の服飾が、わずか二十世紀の前半に起こった西洋式スーツスタイルの衝撃を受け、尚且つ、分割型スタイルの領域では、中国式服飾との競争でその市場を失い、わずかな余地を残す五十年代を経て、終には淘汰されたのである。これは、漢民族伝統服飾の衰退の過程を考える上では、最も注目すべき変化であり、漢民族の民族衣装が消失していく原因を探るキーポイントとなる一步である。また、中華人民共和国成立以後では、漢民族の伝統的服飾上に発生した最も大きな変化ともいえる。

4 文化大革命へ向かう社会状況を背景とする変化

建国当初、共産党幹部や解放軍の士官・兵士の服飾は、人民大衆の羨望の的となり、すぐに大衆は、彼らの服飾を自分達の服装へ取り入れようと試みる。その結果、上下分割型スタイルの制服を基本としたデザインが増え始め、素朴な「人民服」や「中山服」が流行の先端に駆け上がり、この傾向は文化大革命期を迎えて一気に極限に達する。ある回想録では、当時の状況を以下のように述べている。

一九五〇年に入ると、豊かで魅力的な女性の旗袍はほとんど大陸で見られなくなり、装身具、化粧、その他あらゆる装飾品も次第にその姿を消していった。単調な制服のみがイデオロギーの上

では人民を象徴する服飾となり、経済的な実用性と絶対的な平均を求める態度が服飾の上にも求められた。党政機関や組織の現場で働く女性であれ、女学生であれ、基本的なデザインは、男性と同じような藍色の綿サージ布で縫われた「列寧装」を着用した。五十年代中、後期、春秋両用のシャツが「列寧装」にかわったが、一文字や八文字の開襟シャツの前身ごろに大きなポケットが作られただけで、少しの独創性も感じられないものであった。六十年代初め、若い女性達は、春秋両用の開襟シャツが、あまりにも年寄りじみでいて、単調であると感じ始め、若々しく、生き生きした、豊かで活気にみちた、手軽なジッパージャケットを着用し始めたのである。¹⁷⁾

つまり、中華民国時代に端を発する平民化、実用化、素朴化の流れは、五十年代に入り、大きな社会的本流となり社会全体に表れる。この流れは、以前のようにいわゆる知識人といわれた人々の先導によって導き出されたものではなく、社会の中で芽生えた新しい気風と共に、自然発生的に起こった大きな変化であり、その結果、シンプルで素朴な脱ぎ着の楽な衣装が社会の主流を占めるようになるのである。そして、シンプル且つ素朴、安価なデザインの服飾が人々にもてはやされるようになる。「長衣」は次第に淘汰され、その結果、上着や西洋式の長ズボン、半ズボン、簡単なスカートが流行するようになったのである。なぜならこれらの衣装は縫製にも、着用にも便利だったからである。

中華民国が成立した時、形の上では、服飾で着用者の身分や地位を表すという、歴史上何千年と続いた服飾等級制に別れを告げたのであるが¹⁸⁾、実際には上層階級と下層階級に属する人々の間では、明らかな違いが存在していた。例えば、長衫「短衫」には、明確に、二つの階級を区別する標識のような役目を果たしていた。しかしこの時期に至り、中華民国時代に残されていた服飾等級制の概念は、人々の間でまた一段と進んで消えさられていく。「長衫」が急速に社会から消えていく中で、階級間の境界線もあいまいになり、上層階級が制服の類を多用し、下層階級が旧態依然の「上襖下禪」を着用するというような僅かな違い以外は、誰もがスーツ型の上下分割式の服装を着用するようになり、次第に二階級間の格差もあいまいになっていった。指導者、知識人、軍人が制服や中山服を着用すれば、学生、工員、甚だしくは農民までもが、制服、中山服を着用したのである。農民が「襖禪」や中国式の普段着を愛用するように、都市に住む人々も、それらを着用したのである。この時期、服飾等級制の境界線は非常にあいまいになり、終に長い歴史を持つ服飾等級制の歴史に終わりを告げることになるのである。

すべての社会文化の基盤が社会主義化の方向を歩み、「労働人民」の生活モデルが、すべての人民の理想的な生活として掲げられたことから、社会全体が次第に禁欲主義的方向へと移行していく。「旗袍」の衰退を例にとって考えてみると、「旗袍」がもてはやされた時代が意味するものは、中国の性文化が人体の露出を受け入れたためであり、「旗袍」が衰退した原因は、人体の露出を快く思わなくなったためである。もちろんこれ以外にも、ニューモード自体が消失していく傾向にあったことが、「旗袍」の衰退に拍車をかけたことは言うまでもない。庶民の頭の中では、最新流行のファッションと怠惰な生活様式、贅沢な生活習慣が、一つのものとして結びついていた。最新流行のファッションは、その地位を失い、西洋から輸入された服装は街中で見られなくなり、化粧品、首飾りといった装飾品も瞬く間に見られなくなったのである。つまり、複雑で、流行の、高価で華やかなものは、この時代の要求に適合しなくなっていたのである。

人々は、質素で簡単な生活様式や服飾だけが、社会主義の考え方に適応するものと思っ込んだのである。例えば、誰が捨てたかもわからない、そのままではもう着られない衣服を拾ってきて、きれい

に洗い、まだ使える部分を他の衣服を繕う時のためにとっておいたのである。「既に十分古くなったチョッキも、繕って着用し、また破れたらまた繕った。たとえ父親が高級将校で、家庭環境に恵まれていたとしても、新しい衣服を買わなかった」「ズボンが破けたら、新しいズボンをほしがらざるに、教育の強い影響から、新しいズボンでなく、自分で破けたズボンを繕ってはくのである」「自分から進んで他の人の散髪をしてあげ、町に散髪に行くお金を節約するのである」。¹⁹⁾ 彼らの根本にある考え方は、「一に勤勉、二に節約、三に貯蓄、四に節約」「刻苦闘争が革命の本来の姿である」「無産階級の幸福とは革命のために戦うことである」「質素儉約の精神こそが称揚される価値のあるものだ」²⁰⁾であった。上に述べたような人々とは逆に、生活の享受を追及し、積極的に物を消費し、流行の衣服を身に着けることに時間やお金を費やす人がいれば、間違いなく、他人から叱責とあざけりを受けることになったのである。「労働者は勤勉儉約で質素素朴な人間であり、旧社会に生きた搾取階級の寄生虫だけが、毎日自分自身を着飾り、美観などを追及するのである」²¹⁾、と言うように、「『講吃』『講穿』『講玩』『講享楽』。『鶏鳴魚肉』を食すること、『綾羅綢緞』を着用すること。つぎのあたる靴下ではなく、奇抜な衣服を好み、古い衣服を補修して着用し、自分の家で作った衣服を着用することを好まないこと。ガラス製の櫛や色模様の緞子で作られた髪飾りや新しい服を求めること。『服飾に人から賞賛して見られる美しさ』を求めること……」²²⁾、つまり、「身に着けるものに気を配ること自体が資産階級の影響であり、『享楽至上』であり、そのような行為は資産階級、修正主義、帝国主義のものである」²³⁾、とみられたのである。この当時、反修正、反帝国、反資産階級思想が社会の中に蔓延し、質素儉約を旨とすることを同うことができる資料は数多く存在するが一例をあげておく。

資産階級の思想や影響は隙があればどこにでも付け入るものである。しかも往々にして、生活の様々なルートを通して、青年達の中に深く潜行し、彼らを腐蝕し、彼らは一步一步資産階級の思想の泥沼に入り込むことになる。²⁴⁾

衣服には、靴、靴下、蒲団、敷布団なども含まれる。汚れたら洗い、いたんだら補修する、大切にして保管する。いたまないように注意する。私は嘗て農民が十年同じ靴を履き、世代を受け継いでは、同じ服を着ているのを見たことがある。²⁵⁾

中華民国時代に見られた服飾多様化の時代と比較すると、中華人民共和国建国当初から、社会全体において服飾多様化の傾向は弱まっていった。「反帝、反修、反封、反資」の傾向が強くなるに随い、消失していく服飾も生まれた。簡素で素朴なものを追求する社会的な革命の波に乗り、服飾はしだいに統一化へと進んでいき、服飾階級制の消失に伴い、服飾平均化の側面が日一日と顕著になった。服飾上での差別意識はまだ幾分は存在していたものの、すでに明確なものではなくなっていた。それまで一般に、中山服は「幹部服」、中国式の日常着は「庶民服」と見なされていたが、中山服も解放服も中国式日常着もすべて、服飾の分類上から見れば質素で簡単な服装であったため、同一視されるようになる。

おわりに

中華人民共和国成立後の十数年間の服飾の特色を総括すると、中華民国期に比べると、新たにデザインされたものが非常に少なく、淘汰され捨て去られたものが非常に多い時代であったといえる。新たな物が生まれない中、淘汰されるという過程の中では、当然、服飾の選択肢は縮小され、社会の各階級において服飾統一化への道を歩むことになる。その結果、伝統的服飾が消滅すると同時に、社会における服飾の多様化が減少し、社会全体が単調で味気のない、面白みに欠ける社会へと移行していく。しかし、この時代の社会では、たぶんこのような単調な社会体制が、いかにも社会主義の気風にマッチしていると考えられたのであろう。

多くの人が単調な社会を社会主義の風潮と考える中で、急激な社会の変化を行き過ぎと考える人もいた。彼らは、「今日の幸福な生活を美化するためにも、女性は気を回さずに、服飾のデザインにも適当に気を配り、華やかな服にも袖を通してみるべきだ」。²⁶⁾「服装を改善する主な目的は、ここ数年見られた男女の服装における単調、一律化に変化を与えるためである。人々の中にある服装を改善しようとする意欲を起こし、障壁（華やかな服に袖を通すことは、資産階級思想が表れたためである）を取り除くべきだ」。²⁷⁾「新しい服、華やかな服に袖を通し、靴を履くことが資産階級思想に影響されたためであるという言葉は、適当ではない」²⁸⁾と主張し、社会主義を支える労働者であっても、美しい物を愛してかまわないと考えた。しかし、このような考えは、この時代、一般の人々の中に受け入れられる考えではなく、ごく少数派の意見であり、少なくともこの時代では主流派をなす考え方ではなかった²⁹⁾のである。これらの傾向が、次の文化大革命期において、他国の人々から「七億人が同じ服装」と言わしめる時代へとつながっていくことになる。文化大革命期における詳細な服飾変遷については今後の研究課題としたい。

注釈

- 1) 「服飾」の概念については、統一の見解が得られていない。本論中の「服飾」は広義の意味での「服飾」を指す。つまり、頭から足に至るまでのすべての身に着ける物、服装上の装飾方法とその品々、人体上の装飾方法とその品々などすべて含めたものを指す。具体的には「服」は頭から胴体、足、手に至るまで、身体に着けている具体的衣服等の品々を指し、「飾」は、化粧、身体上につけている装飾品、髪型、身体的変化（整形・刺青・纏足等）及び衣服上に付けている装飾品等を指す。
- 2) 「漢民族」の範疇と何をもちいて漢民族と呼ぶかについては、見解の一致を得ていない。また中国の長い歴史の中でも、「漢民族」を指す範疇は複雑に変化しているため、「漢民族」という言葉のなかにも様々な要素が含まれる。本論中の「漢民族」とは、現在中国政府で認めている五十六民族中の一民族としての「漢民族」を指す。
- 3) 民族衣装が存在する民族にとっては、「民族衣装とは何か」と言う質問は全く無意味な問題である。日本の和服を考えれば、その存在がどのようなものであるかが容易に認識できる。しかし、漢民族にとっては民族衣装自体が、曖昧な概念上に存在するのみで、民族衣装に対する固定概念が存在しない。服飾史の専門家の中には、中山服と旗袍を漢民族の民族衣装とする見解も存在するし、宋代の衣装を民族衣装とする見解も存在する。また古代の「深衣」を民族衣装とする見解も存在する。しかし、民族衣装の文化的意

義の一つである「着用する人物の帰属を表す」と言う概念に立つ時、上記三種類の衣装は、どれも「漢民族の民族衣装」としての役目をなさない。またこのような概念で民族衣装をとらえるとき、現在漢民族には民族衣装が存在しないことになる。同時に、各時代を経て、各民族との融合を重ねて受け継がれてきた十九世紀末に存在した漢民族の衣装が宙に浮いてしまう。そこで、筆者は十九世紀末に存在した漢民族の服飾を「漢民族の伝統服飾」という概念でとらえ、「漢民族の民族服飾」の概念と区別している。本論内で論じる「漢民族の伝統服飾」とは十九世紀末に存在した漢民族の服飾を指す。漢民族の歴史を振り返ると、紀元前二世紀から十七世紀（漢代から明末まで）は、「漢族の民族服飾」が形成され広められていった時期である。十七世紀以降は、強制的に満族の服飾を着用すること（主に男性）が義務付けられ、しだいに満族の服飾と漢族の伝統が融合し、一定の形ができあがっていった。つまり、上流社会の漢族男性の服装と髪型は、満族化の過程を経て、一種の異文化融合の産物ができあがった。しかし、上流社会の女性の服飾は基本的に明代の伝統を受け継ぎ、庶民は男女の別なく簡単な「上衣下禪」を基本とするスタイルを身に付け、髪型も以前と比べても大きな変化が生まれていない。筆者は、このような満族と漢族の融合した貴族、官僚、士大夫、庶民、男性と女性の服飾すべてを含めたものを「漢民族の伝統服飾」としてとらえている。つまり、「漢民族の伝統服飾」は、民族の融合・階級・性別を超えたものを指し、この概念を適用することによって、「漢民族の民族服飾」が抱える、歴史上の時間的問題・民族融合の問題・性別、階級にまたがる問題を解決することが可能になる（詳しくは拙著「從戊戌至辛亥—漢族服装變革的開端」『文博』陝西人民出版社、一九九六年第五期）。

- 4) 中山服の原型については、周汎『中国歴代服飾』（学林出版社、一九八四年）、黃士龍『中国服飾史略』（上海文化出版社、一九九四年）、黃能馥『中国服装史』（中国旅游出版社、一九九五年、北京）などから、学生服であるという説、日本の少年団の制服であるという説（少年団の制服は、ヨーロッパ童子軍服の模倣である）、日本の鉄道員の制服であるという説、広東の普段着であるという説、南洋華僑の「企領文装」であるという説など様々で、結論を得ていないが、筆者は学生服の変形であると考えている。西南アジアや東南アジアのインド、マレーシア、インドネシア、ミャンマーなどの国々で、現在、中山服の初期のデザインである「単立襟、四ポケット」の服装が見られることも考慮すべきであると考えている。この問題については、後日紙幅を割きたい。
- 5) 二十世紀における漢民族の服飾の変化を——第一、清末、第二、中華民国、第三、中華人民共和国建国から文化大革命、第四、改革解放——大きく四段階に区分して捉えている。前段階とは第一、二段階を指す。
- 6) 賀崇武「服飾是時代的鏡子」（『首届北京國際服飾基礎理論研討會文集』 首届北京國際服飾基礎理論研究会）八九頁。
- 7) 百年間を捉えたものに、李子雲他編の『百年中国女性形象』（珠海出版社、二〇〇二年）がある。
- 8) 『中国青年』（一九六〇年十四期）三十頁。『中国青年』（一九六五年十四期）十二頁。
- 9) J. K. Fairbank・R. Macfarquhar 主編『劍橋中華人民共和国史』（中国社会科学出版社、一九九〇年、北京、中訳本、下巻）七二一頁。
- 10) 「蘇聯老大哥」の呼び名で旧ソ連は呼ばれ、中国人の尊敬を受ける。
- 11) 鄧穎超「学習蘇聯人民崇高的共產主義道德品性」（『中国青年』一九五二年二十期）二頁。編者「蘇聯是維護世界和平的堡壘」（『中国青年』一九五二年十九期）六頁。張魚「從蘇聯幾個五年計畫看蘇聯建設的成就」（『中国青年』一九五二年十九期）十頁。張林池「蘇聯農民的集团生產与幸福生活」（『中国青年』一九五二年十九期）二〇頁。錢三強「向蘇聯學習，更有効地為祖國服務」（『中国青年』一九五三年二一期）三頁。編者「積極

- 地向蘇聯學習，為逐步地實現祖國的社會主義工業化而努力」（『中國青年』一九五三年二一期）一頁。
- 12) J. K. Fairbank・R. Macfarquhar 主編『劍橋中華人民共和國史』（中訳本 下巻）七二三頁。
 - 13) 当時アメリカ人のことを「美国佬（ヤンキー）」などと蔑視をこめた呼び方で呼んでいた。
 - 14) 雑誌の中で「レーニン主義を守り、現代修正主義の強大な武器に抵抗する」のような文章が書かれることとなる。「保衛列寧主義，反対現代修正主義的強大武器」（『中國青年』一九六〇年九期）。
 - 15) 拙稿「服飾を通してみる漢民族の民族意識——中華民国期——」（『北海道文教大学論集』、二〇〇一年第二号）参照されたい。
 - 16) 「深衣」とは古代中国の最も早期の服飾の一つである。杭間によると、古代においても服飾のスタイルは既に多様化していたが、そのスタイルは「上衣下裳」「衣裳連属」に二代大別することができ、西周以前は、主に「上衣下裳」スタイルが着用されたが、西周から春秋戦国時代に至る頃、今日のワンピースに似たスタイルの「上衣」と「下裳」をつなげたスタイルのものが出来上がり、このスタイルのものを「深衣」と呼んだ、としている。詳しくは杭間『中国文化精華文庫』（山東科学技術出版社、一九九二年）を参照されたい。
 - 17) 劉愛芳「現代女性打扮的風格」（『現代服装』一九九六年第六期）。
 - 18) 李当岐『服装学概論』（高等教育出版社、一九九〇年）四十頁によると、人が服装を身につける意義は、身体的目的と社会的目的に大別されるが、中国では特に、上層階級の人々にとっては社会的目的の一つである、服飾によって、その人の身分や地位を表すということが、非常に重要な目的であった。唐代には「品色衣」制が定められ、宋代、明代へと受け継がれた。「唐代、皇帝の色は赭黄、官僚は一から九品までの紫、緋、緑、青をもって定められた。庶民は白が多用された。」（蘇冰編『漢唐氣象』西北大学出版社、一九九六年、一五九頁）。
 - 19) 汪惠奇「穿針引線補背心」（『中國青年』一九六四年二一期）三二頁。楊新民「一条禪子」（『中國青年』一九五七年十三期）三九頁。友樹「理髮館」（『中國青年』一九五七年八期）三三頁。肖調明「棉衣」（『中國青年』一九五八年十期）二五頁。王根旺「我像父親那樣永遠艱苦朴素」（『中國青年』一九六一年二期）十五頁。
 - 20) 孫作堯「一勤二儉三儲四節」（『中國青年』一九五九年十二期）四十頁。龐瑞卿「艱苦鬭爭是革命者的本色」（『中國青年』一九六〇年二十期）三十頁。高澤虹「無產階級幸福觀就是為革命而鬭爭」（『中國青年』一九六五年四期）二十頁。何孚「這樣的『土里土氣』好得很」（『中國青年』一九六四年十九期）二三頁。
 - 21) 小銳「我喜歡花衣服」（『中國青年』一九五七年九期）三八頁。
 - 22) 小英「不可小看生活問題」（『中國青年』一九六四年十五期）二八頁。楊大然「謹防資產階級衝破生活的缺口」（『中國青年』一九六四年十八期）十四頁。この二人（小英と楊大然）は嘗て自分自身が着る物にこだわったことを深く反省し自己を批判し、反省している。編者「什麼是青年的幸福」（『中國青年』一九五四年十七期）二六頁。
 - 23) 高澤虹「享樂至上是資產階級幸福觀的核心」（『中國青年』一九六五年三期）二四頁。
 - 24) 『中國青年』編集付記（『中國青年』一九六四年十五期）二八頁。
 - 25) 謝覺哉「寫給子女的兩封家信」（『中國青年』一九六一年十三—十四期）二二頁。
 - 26) 編者「姑娘們、穿起花衣服吧」、荒山「為什麼反對穿花衣服」（共に『中國青年』一九五七年九期）三八頁。
 - 27) 編者「不要勉強別人改進服裝」（『中國青年』、一九五六年十二期）三九頁。
 - 28) 編者「不要亂扣資產階級思想的帽子」（『中國青年』、一九五五年三期）三二頁。編者「穿花衣服是不是資產階級思想？（回答讀者的問題）」（『中國青年』一九五四年二二期）三二頁。

- 29) これらの考えが世に発表された時期に注意すると、発表された原因が由来する時期と発表時期が、すべて、五十年代初期に関係していることがわかる。五十年代初期において、思想統制はまだそれほど厳格ではなく、共産党が一般大衆に向かって、自由に意見を述べることを求めた場面などで、このような意見が提起されたことも注目に値する。これらの意見を述べた者が、後に面倒に巻き込まれたこと、甚だしい場合は「右派」のレッテルをはられたことは明らかである。